

長谷川等伯筆隣華院《山水図襖絵》の主題と構成

—北側正面の主題と渡唐天神信仰の関わりを中心に—

長谷川貴信（京都大学）

臨濟宗妙心寺派の大本山妙心寺の塔頭、隣華院の室中の間を飾る《山水図襖絵》十六面は安土桃山時代の絵師、長谷川等伯の慶長四年（1599）の作として夙に知られている。本作はこれまでも多くの先学によって紹介され、様々に論じられてきたが、本作の主題や等伯の制作意図については研究の余地が残されていた。本発表では、本作が安土桃山時代の禅林文芸や連歌、和漢聯句などの聯句文芸の隆盛、それと並行した天神信仰の影響を如実に反映した作品であることを各画面の主題や全体の構成について考察することで指摘する。具体的には、構成全体の中心となる北側正面には中国宋代の詩人、林和靖と天神菅原道真を重ね合わせて鑑賞するような図様が配されていること、全体が七つの場面によって構成され、それぞれの場面ごとに鑑賞者が詩文を想起できるような図様が配されていることを指摘する。そして、主題や構成を明らかにした上で本作の等伯作品における位置づけについて再考し、等伯の画風の変遷について、それらの新知見を加えての解釈を試みる。

発表では、始めに改めて等伯の作例や他の絵師の障壁画作例と本作との比較考察を行う。先行研究では、天正十八年（1589）に描かれたと考えられる旧三玄院障壁画と本作との作風の違いが注目され、作風の変化の要因について様々な説が挙げられている。本発表では比較を通して先学の指摘を確認するとともに、本作と旧三玄院障壁画との画風の懸隔は構図法によるところが大きいことを述べ、その構図法が狩野派の故事人物図に用いられる構図法に類似することを指摘する。

次に本作の主題について最も重要な位置を占めると考えられる北側正面から考察する。具体的には北側正面の図様は図像的に考察すれば「林和靖図」として解釈できることを指摘する。その上で、禅僧の渡唐天神賛の中に林和靖と菅原道真を重ね合わせるような思想が表れていることを示し、それが美濃で還俗した僧、万里集九の詩文中にまで遡ることを指摘する。

次に、隣華院は南化玄興の隠居所として脇坂安治によって開創されたことから、その周辺の思想や文化について考察する。ここでは、南化が万里集九ゆかりの地である美濃や、天神信仰の厚い甲斐とのつながりが深いことを指摘する。また、南化の語録である『虚白録』中の天神賛についても検討を加えることで、南化自身が渡唐天神信仰を有し、また林和靖と天神を重ね見る素養を備えていた可能性を示す。また南化だけでなく、その周辺人物として後陽成天皇などの天神信仰を例示し、安土桃山時代の天神信仰の高まりを示す。さらに、脇坂安治や等伯自身の文化的素養についても言及し、それらの状況を総合して、本作の構成が実現されたことを述べる。

北側正面について詳述した後で、残りの場面の解釈についても提示し、最後に本作に表れた主題表現の手法という視点から、等伯の画風変遷について論じる。